

令和9年度

JCHO 北海道病院
初期臨床研修医 募集案内

独立行政法人地域医療機能推進機構　北海道病院
ジェイコー
Japan Community Health care Organization (JCHO)

次世代の医師を育てる
地域と共にあるJCHO北海道病院だからこそ多くのことを学べます！



病院長
古家　乾

熱意のある指導者と２年間学んでみませんか？

1953年に北海道社会保険中央病院として当院は開設されましたが、2016年4月より独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）北海道病院として再出発しました。2023年には70周年を迎えました。豊平河畔に位置し、藻岩山を眺望できる環境は日常臨床で忙殺される中でも心が癒される環境です。2020年度より臨床研修医制度の見直しが行われ、内科、救急、地域医療に加え、外科、小児科、産婦人科、精神科が必修化されました。入院、外来、救急、地域医療の基本的な診療能力と医師としてのプロフェッショナリズムを身につけることを目標にしています。またGeneralityとSubspecialityのバランスを重視しつつ、後期研修、専門医取得、大学院への進学など各個人の幅広いキャリアパスの形成を支援します。



プログラム責任者
正村　裕紀
（統括診療部長）

JCHO北海道病院。研修医として医師の仕事をしながら、共に成長しましょう。

JCHO北海道病院は、北海道社会保険病院を前身とする公的な総合病院です。

熟練した指導医陣からの直接指導はもとより、卒業年次の近い専攻医（後期研修医）からも多くの助言が得られるなど、研修体制に厚みがあることがセールスポイントです。

１年目の内科24週は、循環器内科、呼吸器内科、消化器内科、糖尿病内科、腎・膠原病内科の5つの内科をローテーションすることで、幅広く均衡のとれた内科研修を行うことができます。また、総合診療科で腰を据えて一般外来（必修）の研修を行います。できる限り1年目で必修分野の研修を修了、2年目には最大で36週の自由選択が可能です。月１回の研修症例報告会、各診療科セミナー、臨床手技・検査手技の実習、医療英語講座など、研修内容は年ごとに充実度を増しています。2年間の研修を通して、社会的な役割を認識し、基本的な診療能力を備えた医師に成長できるよう、病院を挙げて継続的に支援します。

当院は、豊平区の河川敷に隣接しており、藻岩山にも近いロケーションであり、昼休みや休日を利用したアクティビティーにも恵まれた環境です。



JCHO北海道病院は、充実の毎日です！！



医局デスク



職員専用ラウンジ



職員宿舎



コンビニ







独立行政法人地域医療機能推進機構
Japan Community Health Care Organization：JCHO
北海道病院
Hokkaido Hospital

令和9年度

初期臨床研修医 募集案内



JCHO北海道病院は、札幌市豊平区を中心に市の南部地域、約50万人の住民を対象とした急性期対応の地域中核病院であります。

市中心部のＴＶ塔から約5kmで、市民の憩いの場である豊平川に隣接した閑静な地に位置し、藻岩山をはじめ南西部に連なる山々の四季折々の景色を間近に眺めることができます。

令和9年度初期臨床研修医 募集案内 もくじ

1　初期臨床研修プログラム
2　研修指導体制
3　令和9年度初期臨床研修募集要項
4　研修診療科の紹介

1　JCHO北海道病院初期臨床研修プログラム

■目的

本プログラムは、新医師臨床研修の理念に基づき、医師としての人格を涵養し、将来の専門性にかかわらず、医学・医療の果たすべき社会的ニーズを認識しつつ、プライマリ・ケアの基本的な診療能力（態度・技能・知識）を身につけるものとする。

■特徴

○内科は専門分科しているが、合同で内科カンファレンスを行い、総合的研修を行う。また、総合診療救急科で初期診療、救急疾患を幅広く研修する。さらに、小児科、外科、産婦人科、麻酔科、精神科、及び地域保健・医療のローテート研修を行ない、医師としての基本的総合診療能力を身につけることを基本とする。また、希望により選択科（整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、放射線診断科及び病理診断科、脳神経外科、神経内科）の研修を行い、幅広い知識、技術、考え方を身につけることができる。

○病棟は混合体制で編成しているが、消化器センター、呼吸器センター、腎・膠原病センター、周産期医療センターとセンター化しており、症例をより深く検討することが出来る。また他の診療科においても、関連領域での基本的診察法、検査、手技などを学ぶ機会があり、多くの症例を経験することが出来る。

○協力型臨床研修病院である北海道大学病院及び札幌医科大学付属病院にて各診療科、勤務医協中央病院にて救急部門、JCHO札幌北辰病院及び北海道循環器病院にて循環器内科、五稜会病院及び平松記念病院にて精神科のより幅広い研修を行うことが出来る。

○研修協力施設であるJCHO登別病院、倶知安厚生病院、西岡病院における在宅医療、地域医療などの研修を通じ、地域の医療ニーズに関する現状を把握し、積極的に参画する。なお、保健・医療行政の選択研修としてJCHO北海道病院附属介護老人保健施設で、医療のみならず福祉についても修得することが出来る。

＜ローテーション例＞

<table>
<tr><td>（週）</td><td>4</td><td>8</td><td>12</td><td>16</td><td>20</td><td>24</td><td>28</td><td>32</td><td>36</td><td>40</td><td>44</td><td>48</td><td>52</td></tr>
<tr><td>１年目</td><td colspan="6">内科系診療科（24週以上）</td><td colspan="3">救急部門（12週以上）、
（麻酔科4週含む）</td><td>一般外来
総合診療</td><td>外科</td><td>小児科</td><td>産婦人科</td></tr>
<tr><td>２年目</td><td colspan="2">内科系診療科
（8週以上）</td><td>精神科</td><td>地域医療</td><td colspan="9">自由選択　（2タームまで院外研修可）</td></tr>
</table>

4月の研修開始時に、まず医師としての基本事項を共通研修する。その後、各診療科に研修配属されるが、月3～4回研修医のための共通研修会・勉強会を開催しており、参加を義務付けている。

必修科目・分野として2年以内に内科系診療科32週以上、救急部門（麻酔科4週を含む）12週以上、総合診療科（一般外来）4週以上、外科4週以上、小児科4週以上、産婦人科4週以上、精神科4週以上、2年目に地域医療4週以上（うち一般外来2週、在宅診療2週を含む）とする。研修期間の早めの時期に必修科目・分野を終了することを推奨する。

また、救急部門研修12週以上の間に2次救急・災害救急当直に参加し、救急初期から入院まで一貫した診療を経験する。

将来専門としたい診療科以外の科も幅広く経験することが望ましい。

各診療科を北海道大学病院・札幌医科大学附属病院、救急部門を勤医協中央病院、循環器内科をJCHO札幌北辰病院・北海道循環器病院、精神科を五稜会病院・平松記念病院、脳神経外科を札幌柏葉会病院病院、神経内科を札幌山の上病院・札幌しらかば台病院、また、地域医療を倶知安厚生病院・西岡病院・JCHO登別病院にて研修が可能である。当病院附属介護老人保健施設でも研修が可能である。

★医療英語講座について★

日本のグローバル化が進むにあたり、外国人を診療する機会が増えることが予想されます。当院では、このニーズに応えるため平成29年4月から外国人講師を招き、実践に役立つ医学英語講座を開講しています。



＜協力病院＞

●医療法人社団　五稜会病院（札幌市北区）
●北海道大学病院（札幌市北区）
●勤医協中央病院（札幌市東区）
●JCHO札幌北辰病院（札幌市厚別区）
●札幌医科大学附属病院（札幌市中央区）
●医療法人社団（特定）慈藻会　平松記念病院（札幌市中央区）
●JA北海道厚生連　札幌厚生病院（札幌市中央区）

＜研修協力施設＞

●社会医療法人恵和会　西岡病院（札幌市豊平区）
●医療法人　札幌山の上病院（札幌市西区）
●社会医療法人康和会　札幌しらかば台病院（札幌市豊平区）
●札幌柏葉会病院（札幌市豊平区）
●社会医療法人　北海道循環器病院（札幌市中央区）
●札幌市保健所（札幌市中央区）
●JA北海道厚生連　ニセコ羊蹄広域　倶知安厚生病院（虻田郡倶知安町）
●JCHO登別病院（登別市登別東町）
●JCHO北海道病院附属介護老人保健施設（札幌市豊平区）



2　研修指導体制

豊富な症例と充実した指導体制

JCHO北海道病院は、7つの内科系を初めとした多数の診療科を有しており、専門医や指導医の指導の下、幅広く症例を経験することができます。

また、コメディカル部門や看護部門からの指導も受ける機会があり、病院全体で研修医を育てる雰囲気があります。

臨床研修指導医

各診療科で経験豊富な指導医が在籍し、親身に指導します。

内科	半田　喬久（糖尿病・内分泌内科，救急）	小児科	長　和俊
	志田　玄貴（腎臓・膠原病内科，一般外来，救急）	外科	數井　啓蔵
	定岡　邦昌（消化器内科，一般外来，救急）	産婦人科	小田　泰也
	長井　桂（呼吸器内科，一般外来，救急）	眼科	藤尾　直樹
	髙橋　将成（循環器内科，一般外来，救急）	麻酔科	実藤　洋一
	大江　真司（総合診療科）	放射線診断科	杉浦　充

研修発表

複数の診療科をローテーションしながら、合同カンファレンスなどに参加し、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を磨いていきます。

また、月１回研修症例報告会を実施しており、研修医が診療科で経験した症例を紹介し、研修医同士また多くの指導医と議論を重ねていきます。

3　令和９年度初期研修医募集要項

1　勤務条件

勤務時間　8時30分～17時15分（休憩60分）　　夜間勤務：あり／時間外勤務：あり
休暇　　土曜日・日曜日・祝日　　年次休暇　20日/年　　夏季休暇、結婚休暇、忌引休暇あり
当直　　1年次・2年次あり（月1回程度）

2　待遇・条件

身分　　任期付職員（常勤/1年更新）
給与　　（月額）1年次　400,000円　2年次　430,000円
手当　　通勤手当、住居手当、宿日直手当、超勤手当
宿舎・駐車場　あり（有料）
研修医室　　あり
社会保険　　健康保険組合、厚生年金保険、労災保険、雇用保険加入
医師賠償保険　病院で団体加入　※個人加入は任意とする
健康診断　　年2回健康診断、年1回ストレスチェック
保育施設　　院内保育園、病後児保育施設（こどもデイサービスセンター）　※病院敷地内にあり
外部研修活動　学会・研修会への参加可

3　待遇・条件

応募資格　　令和9年3月卒業予定者および既卒者
募集人数　　各卒年次　５名　（合計　１０名）
応募書類　　履歴書、卒業（見込み）証明書、成績証明書
選考方法　　面接（マッチング参加）
応募締切　　マッチング参加登録締切日
採用内定　　マッチング組み合わせ決定日
研修開始　　令和9年4月1日

4　応募方法

応募書類を以下まで郵送してください。
〒062-8618　札幌市豊平区中の島1条8丁目3番18号
JCHO北海道病院　総務企画課

お問い合わせ先　　JCHO北海道病院　総務企画課　　先崎
TEL：011-831-5151
FAX：011-821-3851
E-mail：soumu@hokkaido.jcho.go.jp

★採用試験について★

●**選考方法：面接**　　●**面接日**

- **第一回：　7月31日（金）**← 7月27日（月）応募締切
- **第二回：　8月　5日（水）**← 7月31日（金）応募締切
- **第三回：　8月10日（月）**← 8月　5日（水）応募締切
- **第四回：　8月17日（月）**← 8月12日（水）応募締切

4　研修診療科の紹介

内科

当院には、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、腎・膠原病内科、内分泌・糖尿病内科などの専門の科がありますが、当科では、上記の専門の科の疾患を様々に含む患者を担当することも多く、いろいろな科と連携して診断・治療を進めています。また、高齢化社会において特徴的な疾患（認知症、脳血管障害後遺症、廃用症候群、誤嚥性肺炎など）を診ることも多く、老健、在宅診療医、療養型の病院とも連携してマネージメントを進めています。さらに当科の特徴として血液疾患（自己免疫性血小板減少症、悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、血球貪食症候群など）を扱うことも多く、骨髄穿刺、リンパ節生検などで診断をつけてから必要に応じて専門の病院に紹介することになりますが、患者が80歳後半～90歳台であったり、合併する認知症や諸事情で専門病院に紹介できないこともあり、その場合、大学病院の先生とも連携して治療します。

以上からわかるように当科の研修の際には、主に高齢患者を中心にした疾患の診断・治療を経験していただくことになります。

また、担当した患者が非常に興味深い症例であれば、論文（もちろん英文）を書いてもらうかも知れません。（書き方を指導します。）

消化器内科

消化器内科で診療する臓器は消化管（食道、胃、小腸、大腸）、肝臓、胆嚢・胆管、膵臓と多岐にわたり、また他領域の疾患ともしばしば関連することがあり、診療に当たっては内科一般の知識に加え外科領域の知識も必要とされます。

当科では、消化器悪性腫瘍を含む上下部消化管疾患、肝胆膵疾患全般について外科とも密に連携をとって診療をおこなっており、専門性と一般性を両立した全人的診療をおこなえる医師の育成を目標とした研修をおこなっています。

研修は、指導医のもとで入院患者を担当医として診療に当たり、救急疾患を含む消化器疾患全般から一般内科的な疾患に対しての診療ができることを目標としています。

さらに指導医とともに上下部消化管や胆膵の内視鏡検査・治療、肝胆膵疾患に対するIVR検査・治療の技術を習得し、高度に専門性を有するもの以外は独自で完遂できるレベルを目指します。

当院では、検査・治療を併せた上部消化管内視鏡件数は年間約4000例、下部消化管内視鏡件数は年間約2000例、胆膵内視鏡件数は年間約300例となっており、さらに肝動脈塞栓術ならびにラジオ波焼灼術は年間約100例、さらに経皮経肝膿瘍ドレナージ（PTAD）、経皮経肝胆道ドレナージ（PTBD）、経皮経肝胆嚢ドレナージ（PTGBD）、重症急性膵炎に対する膵局所動注療法などの肝胆膵疾患に対するIVR治療も積極的におこなっています。

当院は日本消化器病学会認定施設、日本肝臓学会関連施設、日本消化器内視鏡学会指導施設、日本消化管学会指導施設となっており、学会専門医を取得する際の研修歴に算定できます。

呼吸器内科

当院呼吸器内科では、呼吸器外科とともに呼吸器センターを形成し、呼吸器疾患全般の診療に対応しています。対象としている疾患は呼吸器腫瘍（原発性肺癌、縦郭腫瘍、胸膜中皮腫等）、呼吸器感染症（肺炎、胸膜炎、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、肺真菌症等）、慢性閉塞性肺疾患、気管支喘息、びまん性肺疾患（特発性間質性肺炎、膠原病肺、過敏性肺炎、サルコイドーシス等）、気胸、睡眠時無呼吸症候群、肺胞低換気症候群、およびこれらによる急性、慢性の呼吸不全などで、呼吸器疾患をほぼ網羅しています。胸部レントゲン写真、CT写真の基本的な読影や、動脈血液ガス分析、呼吸機能検査の解釈など将来どの科に行っても役立つ知識を学ぶことができます。緊急入院が多く、急性期の対処を学んでもらう一方、在宅酸素療法や在宅人工呼吸器療法などの慢性期治療や、終末期医療の経験も可能です。研修では指導医とともに入院患者さんを受けもち、指示や処方、検査計画、リハビリの依頼、患者さんへの説明、退院に向けての社会的支援の調整など、主治医として必要な経験を積めるようにしています。指導医とマンツーマンで行いますので、初めてでも心配いりません。週１回は抄読会があり、最新の文献を読む機会があります。

当科には、内科に加え、プライマリケア、呼吸器、呼吸器内視鏡、感染症、結核・非結核性抗酸菌種、

アレルギー、細胞診、がん薬物療法、の多岐に渡る各専門医・指導医がおり、日本呼吸器学会認定施設、呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医制度認定施設、アレルギー学会アレルギー専門医教育研修施設、癌治療認定医機構認定研修医施設、日本臨床腫瘍学会認定専門医施設となっています。呼吸器科を志望する先生はもちろん、呼吸器科の基礎や初期対応について学びたいなど興味のある先生は広く歓迎いたします。ぜひ当科での研修をご検討下さい。

循環器内科

循環器内科は循環器専門医の常勤医３名で診療にあたっています。1か月に1回の札幌市呼吸循環二次当番に加えての札幌市ACS当番への参加も現在検討中です。循環器救急患者を受け入れ、急性心筋梗塞、不安定狭心症、急性心不全、不整脈などの診療を行っています。また、2020年6月からはHCUが稼働し、循環器疾患だけではない救急疾患を幅広く経験する機会にも恵まれています。

糖尿病や、高血圧などの生活習慣病患者さんは増加の一途であり、健康診断や近隣の病院でみつかった循環器疾患の精密検査や、循環器疾患を合併した患者の周術期や入院中の管理などを担当し総合病院である当院の重要な歯車としての役割を果たさなくてはなりません。

心臓超音波検査、運動負荷検査、心血管カテーテル検査/治療、ペースメーカー治療などを行い、労作性狭心症や末梢血管疾患、慢性心不全、不整脈などの検査や治療にあたっています。心血管カテーテル治療（経皮的冠動脈形成術や経皮的末梢血管形成術）やペースメーカー植込み術などの手技は積極的に行い、症例数は増加しているので、手技習得の研修機会にも恵まれています。

当院は，豊平区と南区の地域に根ざした総合病院としての診療が期待されています。また，札幌市内でも特に高齢化スピードの速い地域であり、地域の病院やクリニックの先生方、施設や介護職員との強い連携に支えられて成り立っています。人の身体はひとつですが、病気は一つではありません。ただ寿命を延長させるだけでなくその人に合った「健康寿命」をいかに伸ばしてかつ、家族含めて皆さんが幸せに暮らして行けるか生活背景にまで気を配る事のできる臨床医を育成できるよう、私達もみなさんの指導を通じて一緒に学んでいます。

札幌市内ではまだ、生まれたばかりの循環器部門ですが、逆に非常に貴重な経験がたくさんできると思います。是非のお越しをお待ちしています。

腎臓内科

当院の腎臓内科は尿異常から慢性腎不全･ネフローゼ，慢性腎臓病のリスク評価、腎不全の保存期の治療から透析導入管理などに力点をおいて、地域の診療をサポートいたします。また、当院の他診療科と連携し、腎障害や透析の患者さんの検査･治療をささえます。また高齢化もあり、腎代替療法として腹膜透析に積極的に取り組んでいます。適応をみきわめ、患者さんやご家族としっかり話あうことで、無理のない安定した腎不全治療を心がけています。

腎臓は生体の内部環境を維持し、すべての身体機能の基礎を支えています。その破綻は短期・長期にわたる様々な病態を生み出します。こうした病態を理解し、その上に体液・電解質・酸塩基異常の鑑別と治療、さらに腎実質疾患と慢性腎臓病の鑑別、治療、管理を行います。主に一般内科的基本事項の本領域における診察技量を習得していただきます。

膠原病内科

リウマチ・膠原病疾患は関節のみならず、多臓器障害を起こし得る慢性・全身性炎症性疾患です。当科では、リウマチ・膠原病疾患の診断・治療のみにとどまらず、不明熱や原因不明の炎症マーカー上昇症例の診療も行っております。このため、各種感染症、悪性腫瘍、血液疾患などとの鑑別診断が重要で、初期診断から、診断確定後の積極的治療、治療（寛解）後の維持療法まで、総合的な診療姿勢が望まれます。

治療薬では、ステロイド、免疫抑制剤が主役を担っておりますが、近年、各種病態を形成するサイトカインが明らかとなり、このサイトカイン（インターロイキンなど）を治療標的とした生物学製剤が治療の主流となってきました。関節リウマチ治療から導かれた各種生物学製剤は、炎症性疾患のみならず、様々

な疾患・病態に対して用いられるようになってきております。
当科では、リウマチ・膠原病疾患症例を受け持っていただき、臨床能力と専門知識を身につけていただき、診断、治療、治療に伴う副作用を学び、得られた経験は、リウマチ・膠原病疾患のみならず、他科の診療にも通じる共通する研修になりえます。

糖尿病・内分泌内科

糖尿病・内分泌内科では、2型糖尿病、1型糖尿病、妊娠糖尿病、脂質異常症、甲状腺疾患ならびにその他内分泌疾患の診療を行っております。この分野は検査や治療の進歩が目覚ましく、診療が複雑化しているため専門医が必要とされている分野の1つです。しかしながら、糖尿病内科専門医や内分泌内科専門医はまだまだ不足しており、将来的にも人材が渇望されている領域です。当科は日本糖尿病学会認定教育施設となっております。症例も豊富なため糖尿病内科専門医取得に必要な経験と実績を十分に積むことが出来ると考えております。
診療体制は、2名の常勤医師で月～金の専門外来を運営し、入院については、糖尿病教育入院や他科術前の血糖管理、内分泌疾患の精査、加療が主な内訳となっております。常勤医師として、糖尿病内科専門医、内分泌内科専門医が在籍しております。
初期臨床研修として当科に在籍する場合には、自科に入院している患者さんだけではなく、他科に入院している糖尿病や内分泌疾患の患者に最も近いところで接し、糖尿病や内分泌診療の一般的な流れを経験して頂きます。特に糖尿病診療については、コメディカルとの連携も必要となるため、定期的に行っている糖尿病診療カンファレンスについて参加いただき、コメディカルとの連携についても経験していただきます。

小児科

当科は北海道大学病院小児科の札幌市内にある関連病院であり、小児科専門医研修施設として、次世代を担う多くの若手小児科医を長年養成してきました。当科には男女問わず若手からベテランまで、９名もの小児科医が在籍しており、広大な南札幌地域の小児医療を担っています。また地域の基幹病院としての役割のみならず、大学病院と協力しながら高い専門性をもった医療を展開していることも特色です。特に産婦人科と共同して周産期医療に力を入れてきた経緯があり、当院の新生児集中治療室（NICU）は開設以来20年以上経過し、現在は地域周産期母子医療センターとして母体・胎児集中治療室（MFICU）3床、同じフロアーにNICU9床、また小児科自体で33床を運営しています。正常・異常を問わず年間500件以上の分娩件数を有し、また札幌市内や近隣の産院から周産期合併症が疑われる新生児の搬送を積極的に受け入れています。
これから臨床研修に進まれる際に、研修病院で学ぶべき到達目標があることをご存知でしょうか？「周産・小児・成育医療」に関しては、周産・小児・成育医療の現場を経験し、医療を必要とする患者とその家族に対して、全人的に対応することを目標に、以下の項目の学習が求められています。
1）周産期や小児の各発達段階に応じて適切な医療が提供できる。
2）周産期や小児の各発達段階に応じて心理社会的側面への配慮ができる。
3）虐待について説明できる。
4）学校、家庭、職場環境に配慮し、地域との連携に参画できる。
5）母子健康手帳を理解し活用できる。
当科はこうした個々の学習項目がスムーズに学べる環境であることはもちろんのこと、学習者の要望に応じて研修内容を柔軟に組んで対応しています。

外科

2020年度初期臨床研修プログラムから、外科が5年ぶりに必修分野に戻りました。将来、外科系を専攻する研修医の方は外科診療スキルを早く身につけられるよう、また外科系を専攻しない研修医の方にも、日常診療で役立つ外科知識と手技を学んでいただきたいと考えております。
当院外科の標榜は、一般外科（なんでも外科）です。年間約600件の手術を行っています。消化器外科

70%が中心になりますが、呼吸器外科15%、内シャント造設などの透析関係手術10%、乳腺甲状腺・体表手術5%と幅広い疾患に対応しております。また、腫瘍内科と連携した癌化学療法、緩和ケア、NSTと共同し栄養管理にも積極的に取り組んでおります。CVポート・PICC（末梢挿入式中心静脈カテーテル）留置なども他科からの依頼も多くあります。研修の中心は入院患者の診療で、外科には平均25人の入院がおります。もちろん外来で、外傷、急性腹症などの急患があれば診療に加わっていただきます。

外科研修目標としては、外科手術にスタッフとして参加することはもちろんですが、①入院全患者の把握し、毎日カルテを記載する。②空いている時間は、ベッドサイドに行き、患者さんとのコミュニケーションを図る。③手術カンファレンスで、症例プレゼンテーション行う。④ガーゼ交換、ドレン抜去、抜鉤など積極的に回診に参加する。⑤CV挿入、PICC挿入、胸腔ドレン挿入、胸水腹水穿刺などの手技に積極的に参加する。⑥縫合・結紮をマスターする。⑦経験疾患の病態、診断、治療法、手術適応、術式、周術期管理の知識を身につける。また、外科が主導する研修医対象の年間研修会を行っており、シュミレーターなどを用いて①縫合・結紮②CVカテーテル挿入③PICC挿入などを行っています。

ほぼ毎日、手術とカンファレンスがあり忙しい4週間ですが、外科チームの一員として臨床に役立つ外科研修ができると考えております。

整形外科

整形外科は運動器の疾患を扱う診療科です。骨・関節などの骨格系とそれを取り囲む筋肉やそれらを支配する神経系からなる「運動器」の機能的改善をめざして治療する外科で、脊椎、骨盤を含む体幹と、四肢を主な治療対象にしています。

背骨と脊髄を扱う「脊椎外科」、上肢を扱う「手の外科」と「肩関節外科」、下肢の「股関節外科」、「膝関節外科」と「足の外科」、スポーツによるけがや障害を扱う「スポーツ医学」、「リウマチ外科」、腫瘍（できもの）を扱う「骨・軟部腫瘍外科」、骨粗鬆症などを扱う「骨代謝外来」と多数の専門分野があります。

スポーツ傷害や交通外傷、労働災害などに代表される打撲、捻挫、骨折などの外傷学は勿論のこと、変形性変化を伴う加齢疾患、骨粗鬆症、関節リウマチ、痛風、運動器の腫瘍、運動器の先天異常など先天性疾患など、新生児時から老年まで幅広い患者層を扱います。

当整形外科では、整形外科疾患の診断と手術適応を各種検査、特に画像検査を駆使して確定します。手術では術式を学習し、実際に助手として手術に参加します。術後管理にも加わり、一連の治療過程を経験してもらい、今後、高齢化の加速とともにますます増える整形外科患者の治療につき興味、理解を持っていただけたらと思います。

泌尿器科

泌尿器科では主に尿路や後腹膜臓器の疾患に対して手術治療や薬剤療法を行っています。当科では年間約400件の経尿道的手術、腹腔鏡手術、開腹手術を行っています。また、腎癌や膀胱癌などに対しては抗癌剤治療や癌免疫治療を行っています。排尿障害の患者に対しては内服治療や、国内でも少ないツリウムレーザーを用いた前立腺蒸散術を行っています。泌尿器科常勤医師は2名で、手術時には大学病院などから応援の医師を派遣してもらうこともあります。当院の周辺には複数の泌尿器科医が常勤する総合病院が少ないこともあり、当科で対処可能なことは出来る限り対応して自己完結する様に努めています。

経尿道的手術や合併症の少ない開腹手術など、研修医の先生にも経験可能な手術が多くあります。また、術後の全身管理や尿路感染症への治療、尿路結石症例への対応を経験することで、今後の医師生活の上で必ず役立つと思います。尿道カテーテル留置困難例への対応や尿管ステント留置術も習得することが可能です。泌尿器科志望の方ではなくても、興味を持った方はぜひ履修をご検討ください。

産婦人科

地域周産期医療センターの産科部門として、ハイリスク妊娠・分娩の管理を中心とした診療をしています。2020年には、地域から92件の母体搬送の受け入れをしました。さらに、ローリスク妊娠や婦人科良性疾

患の診療についても積極的に対応しています。女性医師２名を含む、６名の医師が診療チームを構成しており、産科に関しては　完全チーム制を採用、毎朝行われるカンファレンスで診療情報を共有し方針を決定しています。ハイリスク妊娠・分娩については、妊娠高血圧症候群、切迫早産、早産期前期破水、胎児発育不全、双胎、前置胎盤などの症例が多く、周産期医療センター内で新生児科と定期的に協議しながら、診療しています。婦人科良性疾患については、外来診療での治療を中心としつつ、必要な症例には子宮筋腫や子宮腺筋症、付属器腫瘍に対する腹腔鏡手術を行っています。

研修医の皆さんには、入院患者全員の担当医として診療に参加していただくので、妊娠管理、分娩管理、帝王切開術、婦人科手術などを、バランスよく研修することができます。

眼科

私たちは日常生活の多くの情報を目から得ていますが視覚から得られる情報量は8割以上と言われています。眼の悪い方は認知症になりやすいというほうこくもあり、また一日を規則正しく生活するためには眼からの情報が視覚中枢に到達していることが必要といわれています。

眼科では主として眼球の病気に関して診断治療を行う科です。狭い領域と思われるかもしれませんが、角膜、水晶体、網膜など各組織で専門にわかれており思った以上に深い領域です。内科的治療が主となる領域もあれば外科医としての腕を振るうことができる白内障手術や硝子体手術のような領域もあります。眼科が他の科と異なるのはこの複雑な眼という組織を直接みながら診療をしているということです、つまりX線や採血などによらず病気を確認しながら診療を行うことです。

対象となる年齢層は生後まもない新生児（未熟児網膜症など）から高齢の方（白内障など）広い範囲になります。治療が自科で完結できるのも長所になります。

多くの専門分野にわかれておりそれぞれで内科医、外科医としての道を選ぶことができます。眼科という科に多くの方が興味をもっていただければ幸いです。

耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科は、その領域の疾患を自分で診断し、手術を含めた治療を自分で行える点が魅力的と考えます。診療範囲は耳（聴覚・平衡機能）・鼻・咽喉頭・頭頸部腫瘍・嚥下障害等広く、対象年齢も新生児から高齢者まで幅広いです。現在、指導医１名を含めた常勤医２名体制となっています。

診療内容・業務内容

手　　術：中耳手術、鼻副鼻腔手術、口腔咽頭、喉頭微細手術、頭頸部腫瘍手術など幅広く行っております。鼻副鼻腔腫瘍手術にナビゲーションシステム、甲状腺などの頸部手術に神経モニターを使用、副損傷の可能性を減らし、より正確で治療効果が高くなるよう努めています。

神経耳科：めまい、急性感音難聴、顔面神経麻痺などの入院治療に力を入れております。当院で独自に開発しためまいリハビリ治療を行い、良好な成績を得ています。顔面神経麻痺には言語聴覚士による専門的リハビリを行い、合併症の発症頻度を低下させています。補聴器診療では、難聴者に対してのみではなく、慶應義塾大学の関連施設で研修を受け、補聴器を用いた耳鳴の治療も積極的に行っています。

嚥下障害：多職種による嚥下障害の評価・リハビリにおいて、嚥下内視鏡等を当科で施行、治療方針の決定を行っております。嚥下内視鏡検査の施行件数は道内トップクラスです。

急性疾患：病診連携による急性感染性疾患（扁桃周囲膿瘍、急性喉頭蓋炎、深頸部膿瘍）などの入院治療も積極的に受け入れています。

耳鼻咽喉科が担当する領域は、いわゆる五感のうち、視覚以外の聴覚、触覚、味覚、嗅覚が含まれ、意思疎通やQOLに深く関わり、研修を通してやりがいを感じることができると思います。

皮膚科

皮膚科は皮膚に病変がある疾患をすべて扱う「眼で見える」General Medical Scienceです。専門性が高く、疾患についての知識が多岐にわたるものが要求されます。

当科では日本皮膚科学会で定められた診療ガイドラインに準拠した診療を構築することとしております。さらには、専門医研修施設であり、研修医の教育として診断、皮膚科的検査、皮膚病理、皮膚外科を一通り研修できるプログラムを作成し実施しております。

豊富な症例数があり、悪性黒色腫をはじめとする悪性腫瘍からアトピー性皮膚炎、尋常性乾癬などさまざまな皮膚疾患が経験できます。

皮膚科医は、人体最大の臓器である皮膚を総合的に診断、治療をします。さまざまな手段を使い皮膚へアプローチしております。しかしながら、まだまだ知られていない疾患、治療があるものの、皮膚科医の少なさから明らかになっていません。皮膚の未知の世界を体験してみませんか。

病理診断科

病理診断科は内科、外科をはじめとする全科からの全ての臓器・患者を対象として様々な疾患の確定診断を行います。具体的には組織診及び細胞診・切り出し・術中迅速診断・病理解剖（剖検）を行っています。

当科の研修では、各科の手術検体の切り出し・鏡検を行い実際に病理診断レポートの作成を行います。当院では胃・大腸・食道・肝胆膵の手術症例・消化管ESD/EMR症例が豊富でこれらの病理診断の研修は病理専攻を希望される先生方だけでなく将来消化器内科・外科を目指す先生方にも特におすすめです。

実際の業務内容は、一般病理診断は、手術材料や微小な生検組織を固定染色し、良性か悪性かの判断、感染症や特異炎症などの原因の質的診断をします。一般細胞診断は、喀痰、胸水、腹水などに含まれる細胞や、子宮頚腟部の擦過剥離細胞や、甲状腺、乳腺の穿刺針生検で採取された細胞を検査し、良性か悪性かの判断をします。いずれも、細胞の組織由来や、質的診断と、免疫酵素抗体法による特殊染色、遺伝子異常や癌遺伝子の検索にも応用します。術中迅速病理診断は、手術中に提出された組織片を急速凍結し、標本作製し、10～20分程度で良悪などの確定診断をします。これによって、手術の切除範囲や術式の最終決定に貢献します。病理解剖（剖検）は、懸命な治療にもかかわらず不幸にして亡くなった患者さんの死亡原因を究明することにより、さらなる良い医療と医学・医療技術の向上に貢献します。

病理診断科では、病理専門医2名、臨床検査技師3名（うち細胞診検査士2名、うち認定病理検査技師1名）の体制で標本作製、診断業務を行っています。

この数年の実績は、組織診断役2000件超、うち術中迅速診断役70件超、細胞診役5000件超、病理解剖（剖検）約6件で、消化器臨床病理カンファレンスや、医師会との合同開催のリバーサイド消化器懇話会などを行っています。

麻酔科

外科系診療科の収益は病院全体の総診療収益額の46%、その基盤を支えているのは手術部、麻酔科です。という事実にも関わらず、麻酔科という診療科の業務は未だ、一般の人々だけでなく病院内の医療関係者にも充分、理解されていません。当院での初期研修では救急部門の必修科目に位置づけられていますが、初期研修医の半数は研修開始時にある程度、志望科を決めており、麻酔科では気管内挿管や血管確保といった手技の習得のみを研修目標とする人が多いようです。

麻酔科医は手術中の麻酔だけでなく、患者の周術期の全身管理、手術室内の安全管理を担っており、麻酔科の業務の半分は手術麻酔以外の時間に行われています。麻酔科は外科系診療科というよりも内科系の側面を持っており、麻酔関連の知識・技術だけでなく、患者状態を把握する上で全ての診療科に関して常に知識をアップデートしていく必要があります。ごく短時間で患者とのコミュニケーションを成立させる技術も必要です。手術室外、ペインクリニック外来で慢性痛患者の全人的治療にも携わっています。当院の麻酔科医はペインクリニック専門医の有資格者です。麻酔科医という職業に自負を持って働いています。

単に手技習得が目的ならば特に当院麻酔科で研修する必要なく、どこの病院でもよいと思います。が、せっかく当院の麻酔科で４週間という期間を研修するのであれば、手技習得だけでなく、担当症例の周術期管理を通じて、全科的知識のブラッシュアップ、即時的な医療判断・対応のトレーニング、薬剤知識の拡大、患者対応の訓練、感染予防・安全管理対策の基本の習得など、できる限りの研修を自発的に行って欲しい。麻酔科はそれらが可能な臨床科です。さらに、もし麻酔科医を志す研修医ならば、周術期管理の基礎をじっくりお教えします。

放射線診断科

現在の医療は画像診断なくして成り立たず、しっかりとした画像診断を各診療科の担当医に提供することで医療の質を支えています。また画像補助下の低侵襲治療（インターベンショナルラジオロジー:IVR）によって、より安全な治療/検査を行っています。

実際には

１．CTやMRIといった高度診断機器において適応を含めて被曝を考慮し撮像範囲・造影の有無・撮像法を最終的に決定し、撮影を担当する放射線技師に指示を出します。

２．撮像した画像の読影(分析・診断)及び病変があれば病期分類やその後の方針を示します。また各診療科との定期カンファレンスや直接のコンサルトに応じて各科の医師の疑問に答え、患者にとってより最適な診療になるよう提言をしております。担当医が想定していないより重要な疾患をみつけることも日常茶飯事でその場合もその後の方針を提言します。

３．　IVR：血管造影やCT/超音波/透視補助下に各種血管造影/血管内治療/生検/ドレナージ等を行います。具体的には産後出血や腎・泌尿器系の出血の塞栓術、透析シャントの血管形成術、副腎静脈サンプリング、画像ガイド下に比較的困難な生検・ドレナージなどをしております。

４．診断学のupdate：画像診断の進歩は著しく学会などで得た最新の知見を明日からの診療に役立てるため知識のupdateはかかせません。

近年様々な疾患における画像診断の重要性は益々増しております。また様々な科から出される画像を統合的に見て、臨床情報と併せることによりその患者の全体的な状態を把握できます、臨床研修においても大いに役立つものと考えます。

研修先は、JCHO北海道病院を選ぶ！～研修医の声～



はじめまして、研修医2年目の山崎皇司郎と申します。東京出身で北海道に住むのは研修医になってからが初めてです。とても暮らしやすく、北海道に住んだことがない人にもおすすめです。JCHO北海道病院は職員が皆さん優しく、無駄なストレスなく研修に励めます。上級医の先生方は指導熱心で大変勉強になります。研修医同士も仲が良く、勤務時間後も共に過ごしています。他の病院のことは知りませんが、JCHO北海道病院に来て後悔したことは一度もありません。興味があればぜひ見学にいらしてください。

山崎　皇司郎



初めまして。JCHO北海道病院研修医2年目の水柿孝弥と申します。北海道病院で研修させていただいておりますが、本当にここを選んでよかったと思っています。

魅力はたくさんありますが、1番大きいのは上級医の先生方がほんとに優しく、総合医局なので相談もしやすいことだと思います。色んな科の先生と仲良くなれるので楽しいです。また大体は勤務時間内で仕事が終わるため、帰宅後も毎日充実しております。研修医の仲も良く、週に3.4回ご飯に行ったり遊びに行ったりしいてる毎日です笑

メリハリがあってとてもいい病院なので、ここを選んでも後悔は絶対しないと思います。興味がありましたら是非病院見学にいらしてください！

水柿　孝弥



研修医2年目の付慶傑と申します。中国の医科大学を卒業後、北海道大学大学院を修了し、現在はJCHO北海道病院で初期研修を行っています。

研修を始める前は、中国と日本の医療環境や医療文化の違いに不安を感じていました。しかし、研修が始まってからは、指導医の先生方をはじめ、多職種のスタッフの皆さんに温かく丁寧にご指導いただき、安心して研修に取り組むことができました。

当院は相談しやすい雰囲気があり、疑問点があれば気軽に質問できる環境です。また、幅広い症例を経験できるため、診療能力だけでなく、医学的な考え方や手技、チーム医療の大切さなど、多くのことを学ぶことができています。

私自身、この病院で研修できて本当に良かったと感じています。温かい指導体制の中で、多くの経験を積みながら成長したいと考えている方には、ぜひおすすめしたい研修病院です。

付　慶傑

Be essential for all !

―全ての方にとって必要不可欠な存在に

独立行政法人 地域医療機能推進機構 北海道病院

附属・併設施設
JCHO北海道病院附属介護老人保健施設「ジェイコー中の島」（100床）
JCHO北海道病院健康管理センター
JCHO北海道病院「さくら保育園」
北海道こどもデイサービスセンター(札幌市病後児デイサービス事業)

指定医療
地域医療支援病院、地域周産期母子医療センター、北海道がん診療連携指定病院、臨床研修指定病院、災害救急告示病院（外科、整形外科）、二次救急輪番制参加病院（循環器・呼吸器系、消化器系、小児科、泌尿器系）、札幌市ACSネットワーク参加病院、札幌市産婦人科準三次救急対応医療機関、小児救急医療支援事業参加病院、在宅緊急時後方支援病院体制当番参加病院

病 床 数：314床（一般病床304床、結核病床10床）

診療科目
消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、腎臓内科、膠原病内科、糖尿病・内分泌内科、内科、小児科、外科、心臓血管外科、整形外科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、麻酔科、放射線診断科、病理診断科、リハビリテーション科



〒062-8618
札幌市豊平区中の島1条8丁目3番18号
TEL 011-831-5151 / FAX 011-821-3851
https://hokkaido.jcho.go.jp/